＝特別連載＝

科学技術振興機構『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第380回

岡山大学の活動報告

松本 准
（岡山大学
学術研究院
医歯薬学域（薬）助教）

フィリピンから招へい
最先端の「薬学」に触れる

２０２３年10月15日から21日までの７日間、科学技術振興機構（ＪＳＴ）「さくらサイエンスプログラム」の支援により、フィリピンのサンカルロス大学から６名（学部長、若手教員、大学院生２名、および学部生２名）を岡山大学に招へいしました。

サンカルロス大学は、フィリピンのセブ島に４つのキャンパスを有する総合大学です。特に薬学部のレベルはセブ島の中で第一位であり、フィリピン国内でも常にトップクラスに位置しています。岡山大学とは２０１８年に大学間協定を締結しており、極めて良好な国際関係が構築できていることから、今回のさくらサイエンスプログラムの実施に伴い協定を継続することになりました。

プログラムの目的は、岡山大学を中心として招へい者が最先端の薬学研究に触れることに加えて、岡山大学病院薬剤部および市内保険薬局の見学を通じて先進的な薬剤師業務を学ぶことで、次世代の薬学を担う優秀な人材を育成することでした。

◇

研究交流においては、研究内容に基づいて研究室を基礎と臨床の２つに大別し、それぞれ複数の研究室を見学・体験してもらいました。基礎については、生物・物理・化学の３分野の研究室を訪問しました。それぞれ大きく異なる領域でしたが、招へい者はその全てに対して大変興味を示し、目を輝かせて熱心にメモを取る姿が見られました。臨床については、患者さんの組織・血液を用いた研究や、近年目覚ましく発展を続けるビッグデータを活用した研究内容に触れ、臨床の現場に直結する研究の重要性や楽しさを学んでもらいました。

プログラムスケジュール	
１日目	来日
２日目	岡山大学キャンパスツアー 歓迎会
３日目	薬学系基礎研究室訪問 おかやま薬局上道店訪問
４日目	薬学系臨床研究室訪問 岡山大学病院薬剤部訪問
５日目	特別講演（薬学系基礎・臨床） 成果発表会
６日目	フィールドワーク （岡山市北区、倉敷市）
７日目	帰国

岡山大学病院薬剤部では、日本における病院薬剤師業務の概要について説明を受けた後に、実際に薬剤部内を見学してもらいました。その中では、薬剤師業務の基本である調剤や抗がん剤のミキシングに加えて、治験薬管理に関わる薬剤師業務も見学してもらいました。

招へい者は調剤に関わる最新の医療機器に加えて、岡山大学病院における治験の実施数に大変驚いた様子で、治験において薬剤師が重要な役割を果たしていることを深く学びました。

◇

市内保険薬局としては、岡山県を中心として地域に根差した医療を提供している「おかやま薬局上道店」を訪問。その中では、処方箋の受付から患者さんに薬を手渡すまでの流れを、模擬処方を用いて実演していただくことで、実際の薬局薬剤師の業務を細部まで知ることができました。また、近年の薬局薬剤師における重要な業務である在宅医療についての説明を受け、フィリピンにおける薬剤師業務との大きな相違を感じたようでした。

この後、招へい者には今回のプログラムでどのようなことを学んだかを発表してもらいました。発表内容から、招へい者は日本の最先端の研究環境に大変驚き、日本で研究をしたいという気持ちの芽生えが見受けられ、また日本とフィリピンにおける薬剤師業務の相違についての説明があり、受け入れ側としても学びが多い発表会となりました。特に、招へい者の発表能力が極めて高いことから、受け入れ側としてもフィリピンの教育内容を見習う必要があると感じました。

◇

さくらサイエンスプログラムによるサンカルロス大学からの招へいは今回で３回目になります。新型コロナウイルス感染症の影響で一時招へいを中断せざるを得ない状況でしたが、今回無事に再開することができました。

このような継続的な交流はサンカルロス大学のみならず岡山大学の発展にも繋がっています。また、岡山大学の教員が非常勤講師としてサンカルロス大学の講義を受け持つことや、岡山大学の学生がサンカルロス大学を訪問することで、学生の国際的な視野の拡充にも結びついています。今後も交流を継続することで、日本とフィリピンの交流を担う人材の育成が期待され、またその成果がさらなる薬学の発展に繋がることが想定されます。

最後に、このような有意義な国際交流の機会を与えてくださったＪＳＴさくらサイエンスプログラムに心より感謝申し上げます。

おかやま薬局上道店における保険薬局薬剤師の業務建学

岡山大学薬学部にて（左端は著者の松本氏）

文化体験として後楽園を訪問した招へい者一行ら

岡山大学病院正面玄関にて

◉プログラム終了後の後日談

プログラム終了後、招へい者の全員が日本に興味を持ち、また再来日を強く希望していることを知り、本プログラムの目的が十分に達成されたことを感じました。参加者の全員から個別にお礼の連絡も頂戴し、日本の薬学教育・研究・臨床の技術の高さに驚いたこと、また本プログラムに関わった全ての日本人が大変親切であり、今後も日本人との交流を継続したいと述べていました。交流に関わった本学学生についても、招へい者と関わる中で国際交流の重要性や面白さを強く感じたようで、本学薬学部のディグリーポリシーであるグローバル化に対応した国際感覚の養成にも大きく繋がる成果であったと思います。

現在、サンカルロス大学側から、先方の学術大会に我々教員を招へいしたいとの連絡も頂戴しており、また薬学部のみならず、保健学部との交流プログラムの構築も進んでいます。さらに、次年度は本学学生が先方に訪問し、フィリピンにおける薬学教育・研究・臨床について学ぶプログラムの実施、また先方の学生が本学の博士課程に進学する動きも進んでおり、今回のプログラムが大きな成果へと繋がっていくことが強く期待されます。

日本とフィリピンは距離的にも比較的近く、またフィリピンの方々は英語が堪能であり、今後もこのような プログラムを継続的に実施することで、日本とフィリピンとの円滑な国際関係の構築、また日本人学生の国際的な視点を養成することで、両国の科学技術が発展することを強く願っています。